様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　６月　４日現在

機関番号：４４３１７
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０８４３

研究課題名（和文）　小学校教員の力量形成に関する理論的・実証的研究：力量の明示的・暗黙的側面を射程に

研究課題名（英文）　A theoretical and practical study on the development of elementary school teachers' competencies: focusing on the explicit and tacit aspects of their competencies

研究代表者
森　久佳　（MORI HISAYOSHI）
龍谷大学・短期大学部・准教授
研究者番号：00413287

研究成果の概要（和文）：本研究は，「イメージマップ」の手法を通して，小学校教員が自身の専門的力量を構成しているとして捉えるイメージを明示的・暗黙的の両側面から記述・分析することを目的とした。具体的には，自身が把握する「教職の中核的要素」，また，それらの基盤となるもの対する教員自身の認識を解明することを試みた。その結果，教員たちの力量間には多様な意味が包含されていることや，教員の職務は多様な場面で，多様な人々とかかわることが求められていること，また，他者と関わることが教員の職務の前提となっており，その自他の関わりが，キャリアの差を超えて，教員に解決すべき状況を提示している，といった点などが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to identify the explicit and tacit images of the teaching profession held by elementary school teachers in Japan. The major research questions are as follows: 1) What are the core elements (competencies) of the teaching profession as perceived by elementary school teachers in Japan? 2) On what basis are some competencies considered more or less important than others? We identified commonalities in the participants' opinions on teacher competencies. They are summarized as the following. The teachers listed more than two meanings for the core competencies of the teaching profession. The participants (teachers) perceived their role as teachers and the needed skills for teaching professionals in terms of their relationships with others (children, parents, colleagues, etc.), and considered that such relationships provided the teachers with the situations in which they could deal with problems irrespective of their own carrier.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２０１０年度 | 1,500,000 円 | 450,000 円 | 1,950,000 円 |
| ２０１１年度 | 500,000 円 | 150,000 円 | 650,000 円 |
| ２０１２年度 | 1,100,000 円 | 330,000 円 | 1,430,000 円 |
| 総　計 | 3,100,000 円 | 930,000 円 | 4,030,000 円 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育学，小学校教員，力量形成

## １．研究開始当初の背景

現在，「教員の力量の形成」は教育行政上の重要課題の１つであり，教員評価システムの導入，教員免許更新制など数々の施策が打ち出されている。これは，教職の専門性が改

めて問い直されている今日の動向を反映するものだと言える。

しかし，こうした現行の施策は，他律的な力量形成観に基づき，教員の自主性・自律性を制約する機能を備えているため，自らの力量形成に寄与している実感を教員が持ち難いと指摘されている。

その主要な原因として考えられるのは，教員個々人の認識やその研究的知見が等閑視されていることである。今日の教職は，教科学習における授業者，生徒指導・生活指導・部活動などの指導者や支援者，保護者や地域等の連携・共同者，というように，非常に多様な職務から成り，これらは相互に関連があるとはいえ，質的に異なるものである。そのため，そうした多岐にわたる職務の優先度に関する判断には，個々の教員が把握している「教職における中核的要素」と，それを主柱にして構成される専門職としての教員の力量に依拠する部分があることは事実であり，そのような個別性を彼・彼女らの力量形成の文脈から捨象することはできない。

一方，教員の力量に関する昨今の研究動向にも課題が見受けられる。確かに，近年，教員個人の成長を対象とする研究が教育実践研究の中心的な位置を占めている。しかし，例えば，ライフコース研究やライフヒストリー研究，キャリア発達研究などのアプローチによる研究では，個人的な経験に終始し，教員たちの歩みにおける問題や課題・困難の指摘に止まっていることや，力量を網羅的ないし技術還元的なものにしてしまう点に問題があると指摘されている。また，実践の中に埋め込まれた流動的で複雑な状況に対処する力として「実践知」に着目した研究は，そこに埋め込まれた暗黙的側面としての「暗黙知」に焦点を当てているが，そうした「暗黙知」の認識の内実や共有化の過程といった肝心の内容は明確にされていないと言われている。

すなわち，教職における中核的要素に関して，その明示的（意識的）・暗黙的（無意識的）側面も含めた教員個人の認識（主観的理解）の分析を基盤とした上で，教員に必要とされる力量の具体的実相の解明やその力量形成のモデルを開発するという基本的かつ重要な問題が，喫緊に対処すべき研究課題として今日も横たわっているのである。

## ２．研究の目的

以上のことを背景に，本研究は，教員が自身の専門的力量を構成しているとして捉える「教職の中核的要素」を明示的・暗黙的の両側面から記述・分析し，小学校教員としての力量の内実と構造を解明することを目的とした。対象を小学校教員に絞るのは，学級担任制をとっていることから，先に述べた「非常に多様な職務」を実際に行っている校種であると判断したためである。

そして，具体的な研究課題を以下の通り設定した。

（１） 教員の力量に関する国内外の動向と課題を理論的に整理・明確化する（国内及び国外（米国・英国など）で示されている教員の力量に関するスタンダードや，関連する文献や資料を収集・分析し，その動向と課題を精査する）。

（２） 我が国の小学校教員にインタビューを中心とする質的調査を実施し，彼・彼女らが自らの力量を構成しているものとして捉える複数の「教職における中核的要素」を抽出・分類化しそれらの特定化を図る（地域性や教職歴といった属性を意識しながら，調査対象である教員たちに対して，インタビューとイメージマップの手法とを組み合わせた質的調査によるアプローチで迫る（この手法を用いる根拠については，この後の第３節で報告する）。

（３） 上記（1），（2）のデータや知見を基にして，「教職における中核的要素」の重層性・関係性・優先度などをより詳細に分析した上で，主観的な認識を反映した小学校教員の力量の内実と構造に迫る。

## ３．研究の方法

本研究では，「イメージマップ」を教師の実践的知識を視覚的に把握するための手法として取り入れた。イメージは，「体験・経験・感情や既に学習者が持っている知識などを自分なりに体系づけたものであり，知識や概念の形成つまり思考の一部をなすものである」（三宅正太郎（1995）「イメージマップ・テストの活用」水越敏行監修『授業研究の新しい展望』明治図書，p.86）と捉えられる。そのイメージを可視化するために，厳密な手続きによるのではなく，教師自らの表現方法に委ねていく。なぜなら，教師の実践的知識は，特定の教室の，特有の文脈に極めて依存したもの（Munby, H., Russell, T. and Martin, A.K.(2001) “Teachers’ Knowledge and How It Develops,” In V. Richardson(Ed.), *Handbook of Research on Teaching 4th ed.*, American Educational Research Association, Washington, D.C.）であるがゆえに，教師固有の表現方法があることが想定される。それらを厳密な手続きによって捨象することな

く，ありのまま反映させることに研究上の意義があると言えるだろう。

また，これまでの概念地図法に関する研究では，概念地図そのものを分析対象としていたが，教師の実践的知識に焦点を当てるためには，「voice」を中核に据えねばならない（Elbaz, F. (1991). “Research on Teacher's Knowledge: The Evolution of a Discourse,” *Journal of Curriculum Studies,* 23, pp.1-19)。それゆえ，「イメージマップ」そのものを分析対象とするのではなく，「教師の語り」も合わせて分析することが不可欠なのである。教師の実践的知識を整理したり，体系づけたりするために「イメージマップ」を描き，さらにそれを基に語ることで，ある事柄に関する全体像を自覚したり，概念間の関係性を再認識したりすることが可能となる。

## ４．研究成果

本研究の成果としては、以下の点が挙げられる。

（１） イメージマップによる手法は，特定の教室の，特有の文脈に極めて依存した教員自身の教職観や力量観を，厳密な手続きによって捨象することなく，その教員固有の方法でありのまま反映させることが可能である。そして，それを活用してインタビュー調査を行うことによって，「イメージマップ」そのものを分析対象とするのではなく，「教師の語り」や「voice」を中核に据えた分析が本研究では可能となった。

（２） 教員の教職観や力量観に迫ることができるのかといった課題に迫るべく，実習を終えた学生や教員志望学生を対象に調査を行い，イメージマップとインタビューの長所や短所を意識した上で，互いの良さを活かす方策を開発そして評価と改善を行うに至った。その結果，イメージマップを描く時間や質問方法・内容，また，それを基にインタビューする際に留意する点やデータの分析手法等について，ある程度の枠組みをグループ間で共有することができた。

（３） 現職教員においては，教職の中核には，つねに子ども（児童）の成長について考えていく姿勢や行動，多様な場面に関連性を見出す行為位置づけられていること，また，そうした文脈には，学級担任制が基盤となっていた。さらに，特別活動といった教科学習以外の学びをデザインしていること，生活指導を含めた学級経営を担任が主となって進めているといった日本の小学校教師の職務特性も見られた。

（４） こうした多様な場面を紡いでいく職務の特性としては，多様な場面で，多様な人々とかかわることが求められていること，そして，教員が他者と関わることを職務の前提としていることや，その自他の関わりが，キャリアの差を超えて，教師に解決すべき状況を提示しているといった自他の関係構造が示された。

（５） 教員は，関わりの当事者であると同時に，関わりが生み出す状況の改善案を考案・実践していく主体でもあった。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　14　件）


1. Toshiyuki KIHARA, Hirotoshi YANO and Hisayoshi MORI, (2013) ”Development of a New Curriculum Leadership Model with a Focus on Its Relation to the Professional Learning Communities, ” M.A. Flores, A.A. Carvalho, F.I. Ferreira and M.T. Vilaça (eds.), *Back to the Future: Legacies, Continuities and Changes in Educational Policy, Practice and Research.* (印刷中)（査読有）
2. 木原俊行・矢野裕俊・森久佳・廣瀬真琴（2013)「『学校を基盤とするカリキュラム開発』を推進するリーダー教師のためのハンドブックの開発：カリキュラム・リーダーシップの概念に基づいて」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』22.（印刷中）（査読有）
3. 島田希（2013)「若手教師の成長を促すメンタリング機能の類型化」『高知大学教育実践研究』27.（印刷中）（査読無）
4. 廣瀬真琴・髙谷哲也・森久佳・島田希・深見俊崇・宮橋小百合（2012)「小学校教員志望学生が抱く教職観に関する質的研究」『高知大学教育実践研究』26, pp.115-128.（査読無）
5. 柳林信彦・島田希（2012)「校内研修システムの改善プロセスに関する一考察:『教科指導エキスパート派遣事業』実施校の事例をもとに」『高知大学教育実践研究』26, pp.129-140.（査読無）
6. 深見俊崇（2011)「保育におけるカリキュラム」平安女学院大学短期大学部保育科保育研究会『保育研究』39, pp.18-23.（査読無）
7. 深見俊崇・髙谷哲也・森久佳・島田希・廣瀬真琴・宮橋小百合（2011)「イメージマップによる教員志望学生の教職観の把

握」『日本教育工学会研究報告集』2011(4), pp.27-34.（査読無）

8. 森久佳（2011）「『共同体中心』学校を目指したデューイ実験学校の学習活動の体制とその特色に関する研究」日本教育方法学会『教育方法学研究』36, pp.97-107.（査読有）
9. Toshiyuki KIHARA, Hirotoshi YANO, Hisayoshi MORI（2011）"Towards the Reinterpretation of Curriculum Leadership with a Focus on Its Relation to the Professional Learning Community," *Proceedings of the 15th Biennial of the International Study Association on Teachers and Teaching (ISATT)*, pp.612-620.（査読無）
10. 友野裕一・三崎隆・村松久和・坂口雅彦・島田希（2011）「既習事項を活用しながら新しい見方・考え方を育てる理科学習に関する実践研究」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』11, pp.79-88.（査読有）
11. 島田希・小島郷子・藤田詠司・内田純一・岡谷英明（2011）「体験型授業における省察のあり方：『まなびフォーリオ』の分析を通じて」高知大学『教育実践研究』25, pp.139-146.（査読無）
12. 髙谷哲也（2011）「教員評価の基盤をなす力量観・組織観の特徴と課題」『鹿児島大学教育学部研究紀要』62, pp.251-269.（査読無）
13. 森久佳（2010）「E・F・ヤングの教師の資質・能力観について」『関西教育学会年報』34, pp.26-30.（査読無）
14. 宮橋小百合（2010）「研究ノート　フランスの小学校における市民性教育実践に関する一考察：リヨン市での調査結果から」大阪市立大学大学院文学専攻科教育学教室『教育学論集』36, pp.22-31.（査読無）

〔学会発表〕（計　16　件）

1. 木原俊行・矢野裕俊・森久佳・廣瀬真琴（2012）「『学校を基盤とするカリキュラム開発』を推進するリーダー教師のためのハンドブックの評価：カリキュラム・リーダーシップ理論の実践的展開のために」日本カリキュラム学会第 23 回大会（2012 年 7 月 7 日；於中部大学）
2. 深見俊崇（2012）「わが国における教職科目『教育課程論』の現状と課題」日本教育工学会第 28 回大会(2012 年 9 月 17 日；於長崎大学).
3. 深見俊崇（2012）「４年間の教育実習プログラムを通しての教員志望学生の資質能力の変化」日本教育工学会第 28 回大会（2012 年 9 月 17 日；於長崎大学).
4. 深見俊崇・作野広和・栢野彰秀・大谷みどり・村上幸人（2012）「初年次教育実習プログラムの成果と課題：島根大学教育学部の事例」日本教育大学協会・教育実習研究部門第 26 回研究協議会（2012 年 10 月 5 日；於鹿児島大学).
5. 木原俊行・島田希・寺嶋浩介（2012）「学校における実践研究の発展の状況や要因に関する比較検討：『専門的な学習共同体』の発展に関する理論を用いて」日本教師教育学会第 22 回研究大会(2012 年 9 月 9 日；於東洋大学）.
6. 島田希（2012）「若手教師支援に関わるミドル・リーダーのためのメンタリング・ハンドブックの開発」日本教育工学会第 28 回全国大会（2012 年 9 月 17 日；於長崎大学）.
7. 深見俊崇（2011）「初任幼稚園教諭・初任保育士の実践イメージの変容」日本保育学会第 64 回大会（2011 年 5 月 22 日；於玉川大学).
8. 深見俊崇（2011）「教員志望学生の実践イメージに関する経年比較研究」日本教育工学会第 27 回大会（2011 年 9 月 18 日；於首都大学東京).
9. Toshiyuki KIHARA, Hirotoshi YANO, Hisayoshi MORI（2011）"Towards the Reinterpretation of Curriculum Leadership with a Focus on Its Relation to the Professional Learning Community," 15th Biennial of the International Study Association on Teachers and Teaching (ISATT), Braga, University of Minho(Portugal)（2011 年 7 月 7 日；於ミーニョ大学, ポルトガル）.
10. 深見俊崇（2010）「教職科目『教師論』を通しての保育者志望学生の保育者イメージの変容」日本保育学会第 63 回大会（2010 年 5 月 22 日；於松山東雲女子大学).
11. 深見俊崇（2010）「アクティブ・ラーニングを基にした教員志望学生の ICT 活用指導力を高める講義の取り組み」日本教育工学会第 26 回大会(2010 年 9 月 20 日；於金城学院大学).
12. 深見俊崇（2010）「保育所実習における実習生が抱える課題の分析」日本教育工学会研究会（2011 年 3 月 5 日；於静岡大学).
13. 森久佳（2010）「『共同体中心（community centered)』学校を目指したデューイ実験学校（Dewey's Laboratory School）の教育実践に関する研究」日本教育方法学会第 46 回大会（2010 年 10 月 9 日；於国士舘大学).
14. 谷塚光典・島田希・東原義訓・三崎隆・

岩田靖（2010）「教科専門と教科教育のチーム指導体制による授業研究を通した現職教員研修プログラムの開発」日本教育工学会第 26 回全国大会（2010 年 9 月 18 日；於金城学院大学）.

15. 金子満・髙谷哲也・江頭智宏（2010）「自治体における評価の現状と課題」九州教育学会第 62 回大会（2010 年 12 月 11 日；於九州大学）.
16. 宮橋小百合（2010）「四国学院大学の初年次教育カリキュラムにおけるキャンパス・コミュニティの形成」大学教育学会 32 回大会（2010 年 6 月 15 日；於愛媛大学）.

〔図書〕（計　5　件）

1. 村川雅弘（編著）千々布敏弥・亀田徹・南部昌敏・秋田喜代美・田村知子・鹿毛雅治・島田希・田上富男・高野浩男・宮本治・今井忍ほか（2012）『ワークショップ型校内研究充実化・活性化のための戦略＆プラン 43』教育開発研究所（執筆担当箇所：56 - 60 頁）.
2. 永岡慶三・植野真臣・山内祐平（編著）橋本貴充・石岡恒憲・松河秀哉・赤倉貴子・森本康彦・小川賀代・谷塚光典・寺尾敦・藤原康宏・加藤浩・西森年寿・深見俊崇（2012）『教育工学における学習評価』ミネルヴァ書房（執筆担当箇所：174 - 188 頁）.
3. 稲垣忠（編訳）亀井美穂子・小川真理子・林向達・金子大輔・益川弘如・藤谷哲・深見俊崇（2012）『デジタル社会の学びのかたち：教育とテクノロジーの再考』北大路書房（執筆担当箇所：167 - 201 頁）.
4. 髙谷哲也（編著）・島田希・森久佳・深見俊崇・宮橋小百合・廣瀬真琴・戸高陽子・中山竜太（2011）『教師の仕事と求められる力量：新たな時代への対応と教師研究の知見から（現場と結ぶ教職シリーズ 17）』あいり出版（全 221 頁）.
5. 稲垣忠・鈴木克明（編著）・市川尚・寺嶋浩介・坂本英祐・井口厳・成瀬啓・深見俊崇・菅原弘一（2011）『授業設計マニュアル：教師のためのインストラクショナルデザイン』北大路書房（執筆担当箇所：145 - 165 頁）.

６．研究組織

(1)研究代表者

森　久佳（MORI　HISAYOSHI）
龍谷大学・短期大学部・准教授
研究者番号：00413287

(2)研究分担者

島田　希（SHIMADA　NOZOMI）
高知大学・附属教職実践センター・講師
研究者番号：40506713

髙谷哲也（TAKATANI TETSUYA）
鹿児島大学・教育学部・准教授
研究者番号：00464595

廣瀬真琴（HIROSE　MAKOTO）
鹿児島大学・教育学部・講師
研究者番号：80461375

深見俊崇（FUKAMI　TOSHITAKA）
島根大学・教育学部・講師
研究者番号：80461375

宮橋小百合（MIYAHASHI　SAYURI）
四国学院大学・総合教育研究センター・助教
研究者番号：80461375

(3)連携研究者

なし。